2025

AUTOBACS SUPERGT

Rd8 MOTEGI GT300km RACE　GRAND FINAL

RACE REPORT

NISSAN　REALIZE　YOKOHAMA　Nihon Mobility Service　日産車体　Logisnext　UD TRUCKS　ALTIA　PRESTIGE INTERNATIONAL
AICHIKIKAI　日産モータースポーツ&カスタマイズ　ROCK PAINT　STEARS COAT　Quick Pro Paint　TOPPAN　Energywith　エムエスピー　NISSAN SERVICE CENTER
NGK　NTK　KAMIMOTO　DEFF　SUNTORY　PUMA　KSB
日産神奈川　日産東京　兵庫日産　日産大阪　埼玉日産　日産プリンス福島　日産プリンス埼玉　岐阜日産　愛知日産　日産プリンス名古屋　京都日産　愛媛日産　鹿児島日産
帯広日産　日産青森　日産サティオ弘前　日産プリンス宮城　秋田日産　日産プリンス秋田　日産サティオ秋田　福島日産　栃木日産　日産プリンス栃木　日産プリンス群馬　長野日産　日産サティオ埼玉　日産自動車販売　千葉日産
日産プリンス千葉　富澤日産　日産プリンス三重　静岡日産　日産プリンス静岡　浜松日産　三河日産　日産プリンス兵庫　和歌山日産　滋賀日産　日産サティオ岡山　日産プリンス広島　日産プリンス山口　香川日産　長崎日産
日産福岡　日産サティオ佐賀　日産プリンス大分　日産プリンス熊本　熊本日産　日産プリンス長崎　旭川日産　岩手日産　日産プリンス岩手　日産サティオ新潟西　甲府日産　松本日産　日産サティオ千葉　日産サティオ湘南
富山日産　日産サティオ富山　石川日産　福井日産　奈良日産　日産プリンス和歌山　日産サティオ鳥取　鳥取日産　宮崎日産　日産サティオ宮崎

モビリティリゾート　もてぎ
令和7年11月1日（土）～11月2日（日）

2025 SUPER GT 第8戦もてぎ レースレポート

11月1日（土）予選がスタート。
ランキング2位の56号車リアライズ日産メカニックチャレンジ GT-R。トップの65号車LEON PYRAMID AMGとの差はわずか1.5ポイント。優勝すれば自力でチャンピオンを獲得できる状況での予選となります。
最終戦は全車サクセスウェイト0kg。ハンデなしの純粋な速さが問われる戦いです。
午後2時、Q1がスタート。
56号車はAグループに振り分けられ、平手晃平選手がステアリングを握りました。
平手選手がマークしたタイムは1分47秒522。これはAグループ9番手でした。トップの61号車SUBARU BRZには1.474秒差です。
上位9台がQ2に進出できる中、56号車は9番手という最後の枠でQ2進出を決めました。
一方、Bグループではライバルの65号車LEON PYRAMID AMGが7番手でQ2に進出しています。

午後2時53分、Q2がスタート。

ここからはジョアオ・パオロ・デ・オリベイラ選手がアタックを担当しました。
オリベイラ選手は1分46秒384のタイムをマーク。Q1から約1.1秒タイムを縮めました。
結果は4番手。
2番手の5号車マッハ車検(1分46秒263)、3番手の52号車Green Brave(1分46秒379)に次ぐ4番グリッドを獲得しました。
ライバルの65号車LEON PYRAMID AMGはQ2で1分46秒862をマークし、14番手。
もう一台のタイトル候補、7号車CARGUY FERRARI 296 GT3は1分46秒714で10番手。
チャンピオン争いをする3台の中で、56号車が最も前のグリッドからスタートすることになりました。
ライバルの65号車は14番グリッド、7号車は10番グリッドと、予選では56号車が有利な位置。
決勝レースでは、この4番グリッドから2022年以来3年ぶりのGT300クラスチャンピオン獲得を目指すことになります。

決勝　RACE DAY

2025年11月4日（日）、もてぎで行われたスーパー　GT最終戦。

シリーズ逆転タイトルを狙った56号車リアライズ日産メカニックチャレンジGT-Rは、平手晃平選手とJ.P.デ・オリベイラ選手のコンビで臨み、予選4位と好位置につけていよいよ決勝を迎えました。

ランキング上位で争う65号車LEON AMGが14番手に留まったことで、逆転チャンピオンへの期待が大きく膨らむ状況でした。3位以内でフィニッシュすればタイトル獲得という明確な条件のもと、決戦がスタートしました。
前半スティントを担当した平手選手は、4番手を守りながら状況を見極める慎重な走りを見せました。レースが動いたのは**7周目** 13時19分19秒、GT300車両のコースオフによりFCYが導入された場面でした。13時22分54秒までの約3分半という時間でしたが、各チームの戦略を分断するには充分でした。56号車は4輪交換を行い、オリベイラ選手へドライブを託しました。一方で、5号車はタイヤ無交換、666号車ポルシェはリヤ2輪のみ、65号車はフロント2輪のみ交換という判断で順位を押し上げ、この差が後半の展開に影響を与える結果となりました。

後半スティントに入ったオリベイラ選手は、前方を追いながら確実にポジションをキープしていきました。
上位集団は2位SUBARU BRZ、3位Green Brave、4位666号車ポルシェ、5位56号車リアライズ日産メカニックチャレンジGT-Rという僅差の隊列を形成して周回を重ねました。

55周目 14時44分12秒には再びFCYが導入され、14時45分34秒に解除されると、残された数周で順位を動かす必要がある厳しい状況となりました。
リスタート後、オリベイラ選手は52号車をかわして4位に浮上し、ついにタイトル圏内である3位まであと1台。
しかし、前を走る666号車との差は容易には縮まらず、厳しい状況が続きました。平手選手が前半に築いた位置取りと、オリベイラ選手の粘り強い攻めが合わさり、チームは最後まで望みを失わず走り続けました。

そして迎えた最終ラップ、オリベイラ選手は必死に追い続けましたが、チェッカーフラッグが振られた時、3位との差は**0.268秒**でした。もしこのわずかな差を逆転できていれば、56号車は逆転王者となる可能性がありましたが、結果は4位フィニッシュとなり、シリーズランキングは1ポイント差の2位でした。
平手選手とオリベイラ選手のふたりは、前半・後半それぞれの役割を果たし、チームとして最後まで諦めない走りを見せてくれました。惜しくも王座には届きませんでしたが、わずか0.268秒、そして1ポイント差という僅差がタイトルを分けたシーズンでした。

来季こそ、積み重ねた力が実を結ぶシーズンとなることを期待しています。

決勝日　RACE DAY

― Student Special ―
監督とドライバーに聞く

近藤監督にインタビュー

松田次生選手、25年半におよぶレース活動に幕

「本当に限界まで頑張ったんだろうね」

2025シーズンをもってSUPER GTを引退する松田次生選手。近藤真彦監督にとって、自分の手元にいるトップドライバーが引退するのは「生まれて初めて」だという。

「今日の無線を聞いてても、彼の一言一言はやっぱり重いよね。このレースで、今日、明日で引退するんだっていう思いがすごい強いよね」
松田は予選後の無線で「名取、早いわ」と漏らした。
そしてピットに戻ってマシンから降りると、笑いながらこう言ったという。
「引退決めて良かったですよ」

監督は続ける。「もう叶わなかったから、鈴鹿なんか。フォーミュラも、もう、ずっと連勝連勝で、手はつけられんけど速いドライバーだった。でも、そのドライバーが今日予選終わって、一周して帰ってくる無線のなかで、やっぱり名取、早いわって帰ってきたんだよね」
「本当に長い間お疲れ様でした」
――日産の7年間を支えたエースドライバーへ、監督からの惜別の言葉だった。

ランキング上位で迎える最終戦 ――「ちょっと今日眠れそうもない」

チャンピオン争いに絡む位置で迎える最終戦もてぎ。その重圧について尋ねると、監督は率直に語った。

――ランキング上位でこの最終戦を迎えることになって、監督としてプレッシャーというか、緊張感のようなものは、やはりありますか？

「それはあるね。やっぱりチャンピオン獲ってるチームなんで。だから、チャンピオン獲ってもおかしくないチームだからね、逆に。だからみんなが期待してる」

学生たち、日産自動車、日産ファン、そしてスポンサーのリアライズ――すべての関係者の視線がこのチームに注がれている。

「学生だって、いや、もしかしたらチャンピオン獲れるかもしれないと思ってるわけでしょう。日産自動車もそうだし、日産ファンもそうだし。うちのスポンサーであるリアライズさんもそうだし、みんながそのチャンピオンにしか頭が行ってないから、もう、ちょっと今日眠れそうもないよね。」

しかし、監督はこれを「良いプレッシャー」だと言う。

「最終戦に来て、ノープレッシャーで明日、何があっても、もう明日で最終戦だから、なんて言うよりも、明日何かあればチャンピオンになれる。何かあれば優勝できる。24号車だって、良いところにいますから。ある意味、明日は今年一番ドキドキするレースになるかもしれないね」

チャンピオン獲ったら？「パーティーだね。大騒ぎだね」

もしシリーズチャンピオンを獲ったら、真っ先にやりたいことは？
監督の答えは即答だった。「パーティーだね。大騒ぎだね」
「だって野球だってそうじゃん。シリーズ決めたらさ、みんなでビールやシャンパンでわあきゃあ、あの騒ぎあるじゃない。あれがやりたくてやってんだよね、みんな」

特に学生さんたちと、チャンピオンの喜びを一緒に、同じ時間、同じ場所で過ごせたらいいなと監督は言う。
「多分癖になると思うよ、チャンピオンは」

縁起のいい茂木で、最後は神頼み

1年の集大成を茂木で迎えることについて聞くと、監督の顔がほころんだ。
「うちのチームにとっては割と験がいいサーキットですね」
チャンピオンを獲ったのもここ。スーパーフォーミュラでもポールポジションを取ることが多い。
「明日はすべてのギアがあって、最後はもう本当に茂木の神様に祈るしかないんだ。応援してて一緒に頑張ろうって話だから」

Student Special ―
監督とドライバーに聞く

話題のペヤング、今日は松茸入り

監督のInstagramで密かに話題になっている「オリジナルペヤング」。この日も用意されていた。

「今日なに？ 普通のじゃなくて、大きいペヤングに松茸入れてくれたみたいなやつ」
と、監督は笑いながら紹介する。

じつはこれ、監督が作っているわけではなく、監督の友人で一流の料理人が手がけているものなのだという。
「それを最初にインスタに上げたら、めちゃくちゃ盛り上がったんですよ」
と語る。
その投稿は、ペヤングを製造しているまるか食品の社長の目にも留まったらしく、
「近藤さん、なんで知ってるんですか？」
と連絡が来たという。
数週間後には、本当に松茸入りペヤングが商品化されてしまった。
「俺の方が早かったんだけどね」と、監督は笑う。
その後、まるか食品から松茸入りペヤングが段ボール1箱届いたものの、すべてご家族に食べられてしまったそうだ。

Student Special ―
監督とドライバーに聞く

――自動運転AIチャレンジで唯一の完走達成

インタビューの途中、日産栃木自動車大学校の学生から報告が入った。自動運転AIチャレンジにおいて、他校がクラッシュする中、唯一の完走を達成したというのだ。今年から栃木校の学生は自動運転AIチャレンジという無人のカートを走らせるという競技に挑戦していた。
「すげーじゃん。いやいやいや、ちょっとやばいなこれ」
監督も驚きを隠せない。「これはもうイーロンマスクのとこに就職した方がいいよね(笑)」
成功の鍵は、走行データの効果的な活用にあった。学生たちは熟練した他の参加者のラインをトレースし、速度変化を最小限に抑えるようAIを調整。さらに、1日目と2日目という2回の走行機会を最大限に活かした。
「今まで1度も完走することができなかったんです。そのレースのフォーマットが1日目と2日目で、2回同じ時間の走行があったので、1日目のフィードバックをもとに、2日目に試してみたんです」

上手い人のラインを参考に、速度をできるだけ急激に低下させないアルゴリズムの実装
――それが初完走という結果に結びついた。

監督は学生たちの成長を喜びながらも大切なメッセージを送った。
「ぜひね、自動運転の怖さというものも再確認してほしいね。今はテスト段階だから、事故を起こすこともあるかもしれない。自動運転は夢があるから、安全第一を考えて夢を繋いでステップアップしてください」

栃木校が挑戦している「自動運転AIチャレンジ」。初年度参加で4位を獲得している。

Student Special ―
監督とドライバーに聞く

自動運転レースの現在地と未来 ——A2RLについて

学生のAIチャレンジの話を受けて、話題はスーパーフォーミュラを使用した自動運転プロジェクトA2RL（Abu Dhabi Autonomous Racing League）へと移った。

——スーパーフォーミュラを使用した自動運転A2RLの活動について、どう思われていますか？また、レース業界で自動運転車が普及するなら、どういう用途で使われると思いますか？
監督はまず、現状について語る。
「あれ15秒落ちぐらい？一周一周。スーパーフォーミュラーの普通のタイムで15秒落ちぐらいしか行けなかったんだよ」。現在の自動運転スーパーフォーミュラは、通常のラップタイムから1周あたり約15秒遅い。
「夢があるよね、それを考えたら。だからやっぱりすごいんだよね。あれ700時間ぐらい走ったかな？多分鈴鹿を朝方に走って」
700時間以上の走行データの蓄積。それでもなお15秒のギャップ。しかし監督はこのプロジェクトを評価し、JRPとしてもサポートを続ける意向を示す。

「だからそういう意味ではもう積み重ねだ。だけど、あのプロジェクトはまだまだ続けて行きたいなと思って。JRPとしてもすごく応援してるし、サポートして行きたい」

「今レース業界の人たちがみんな口を揃えて言うのは、音と匂いと、スピードと。これらはやっぱり一番大事にしていきたいなって。僕が生きてる限りは、その自動運転とかAIでレースができるところまでは多分来ないと思うね」

出典:スーパーフォーミュラ公式サイト https://superformula.net/sf3/release/17498/

平手選手、金丸選手、オリベイラ選手に聞く

Student Special ―
監督とドライバーに聞く

ランキング争いのなかで感じる「良いプレッシャー」

――平手選手、ランキング上位で最終戦を迎えますが、プレッシャーは感じていますか？

平手選手： プレッシャーはいつも感じていますね。ただ、ランキング1位ではないので、むしろ追いかける身として来ているんです。だから、これは良いプレッシャーだと思っています。

追う立場だからこそ、攻めの姿勢で挑めるという平手選手。

世界中で愛される日産 GT-R、その魅力とは

――金丸選手、日産 GT-Rをドライバー目線で見て、他メーカーとの違いはどんなところでしょうか？

金丸選手： GT-Rでいうと、他の車は結構モデルチェンジしたり、どのGT3をどの車で作るかみたいなところで変わってくるんですけど、GT-R自体はすごく長く使われているんです。

世界中どこへ行っても本当にありがたいことに、僕がGT3でレースをしていると、そのクルマ自体にファンがたくさんいることを実感します。レース中やパドックでも、よく写真を撮ってもらえるので、注目してもらえているんだなと感じます。

GT-Rの持つブランド力と、長年培われてきた信頼性。それがドライバーにとっても誇りとなっている。

松田次生選手への思い出を語る

今シーズンで引退を表明している松田次生選手。長年Super GTを戦ってきた彼について、3名の選手に思い出を語ってもらった。

オリベイラ選手：（日本語訳）次生さんとは本当にたくさんの思い出がありますね。6年間チームメイトとして過ごした時間は、いつも楽しかった。ディナーの時はいつも笑っていましたし、彼は本当に良いキャラクターです。間違いなく、Super GTで彼はとても惜しまれる存在になるでしょう。

平手選手： 僕も過去にフォーミュラ日本で、次生さんとチームメイトとしてやっていました。本当に良い先輩でありながら、プライベートではすごく楽しいんです。いじりがいのある先輩で面白いんですけど（笑）、いざレースとなるとすごくストイック。トレーニングを見ていると、「いやあ、すごいな」と本当に尊敬します。

あとは車も自転車も飛行機も大好きなオタクキャラなので、引退された後どうなるか楽しみですね。

金丸選手： 僕はあまり仲良しこよしというところまではなかったんですけど、やっぱりこれだけ長くドライブを続けてきて、一番最多勝も獲っている。これだけ乗れるということは、ある程度の成績を出さないと、速くないと乗れないということなんです。すごいことだなと。

乗っているときと乗っていないときのギャップがすごすぎて、僕も最近話をさせてもらうんですけど、本当に同じ人が乗っているのかなと思う時があります（笑）。

Student Special ―
監督とドライバーに聞く

もし優勝したら …夢の日産車は？

最終戦を前に、少し趣向を変えた質問を投げかけてみた。「もし優勝したら、ご褒美にどんな日産車が欲しいですか？」

オリベイラ選手：（日本語訳）今年、私はシリーズチャンピオンにはなることはできませんが、もし優勝したら、エルグランドが欲しいですね。そしてメカニック全員を乗せて、一緒に楽しい一日を過ごしたいです。
チーム全員で楽しい時間を過ごしたいという、チームへの愛が感じられる答えだった。
平手選手： R34 GT-Rに憧れて、僕は車好きになったんです。ちょっと高いですけど、34 GT-Rを手に入れたいですね。
金丸選手： 僕はこの2年ぐらい、GT-RのR35のGT3に結構お世話になっているので、R35が欲しいですね。

それぞれの日産愛が垣間見える回答となった。

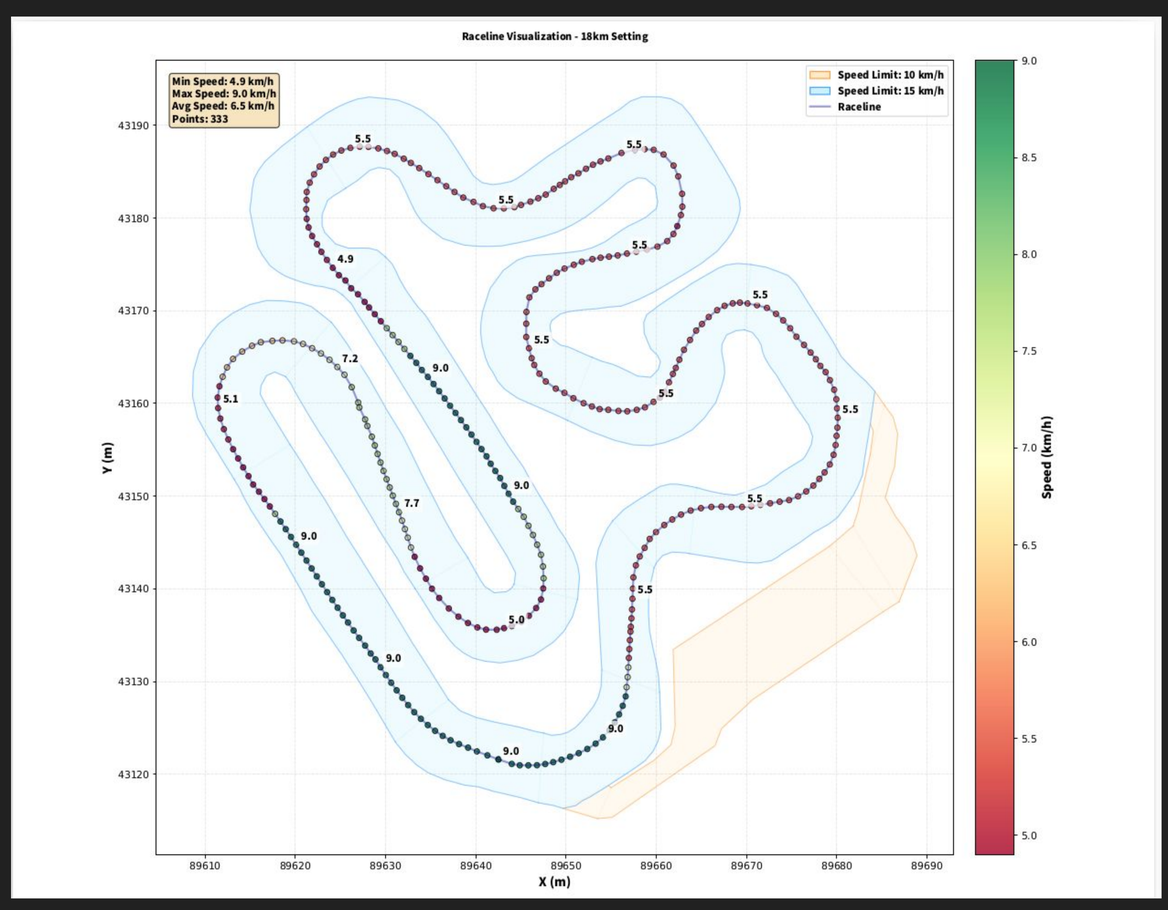
特別企画：AIとレーシングドライバー、5年後の対決は？

インタビューの終盤に、自動運転AIチャレンジに参加した広報担当から、質問が投げかけられた。

選手たちには実際にその自動運転車が走行したコース『CITY CIRCUIT TOKYO BAY』のレーシングラインを描いてもらい、AIとの違いについて議論してみた。人間のドライバーは感覚的にアウト・イン・アウトのラインを描くのに対し、AIは物理的な、数値的に最適解を求めるという違いが浮き彫りになった。

オリベイラ選手はウェットライン、オリジナルラインを描いてくれました(笑)。

記念にコースマップと写真を取っていただきました！



AIが導き出したライン

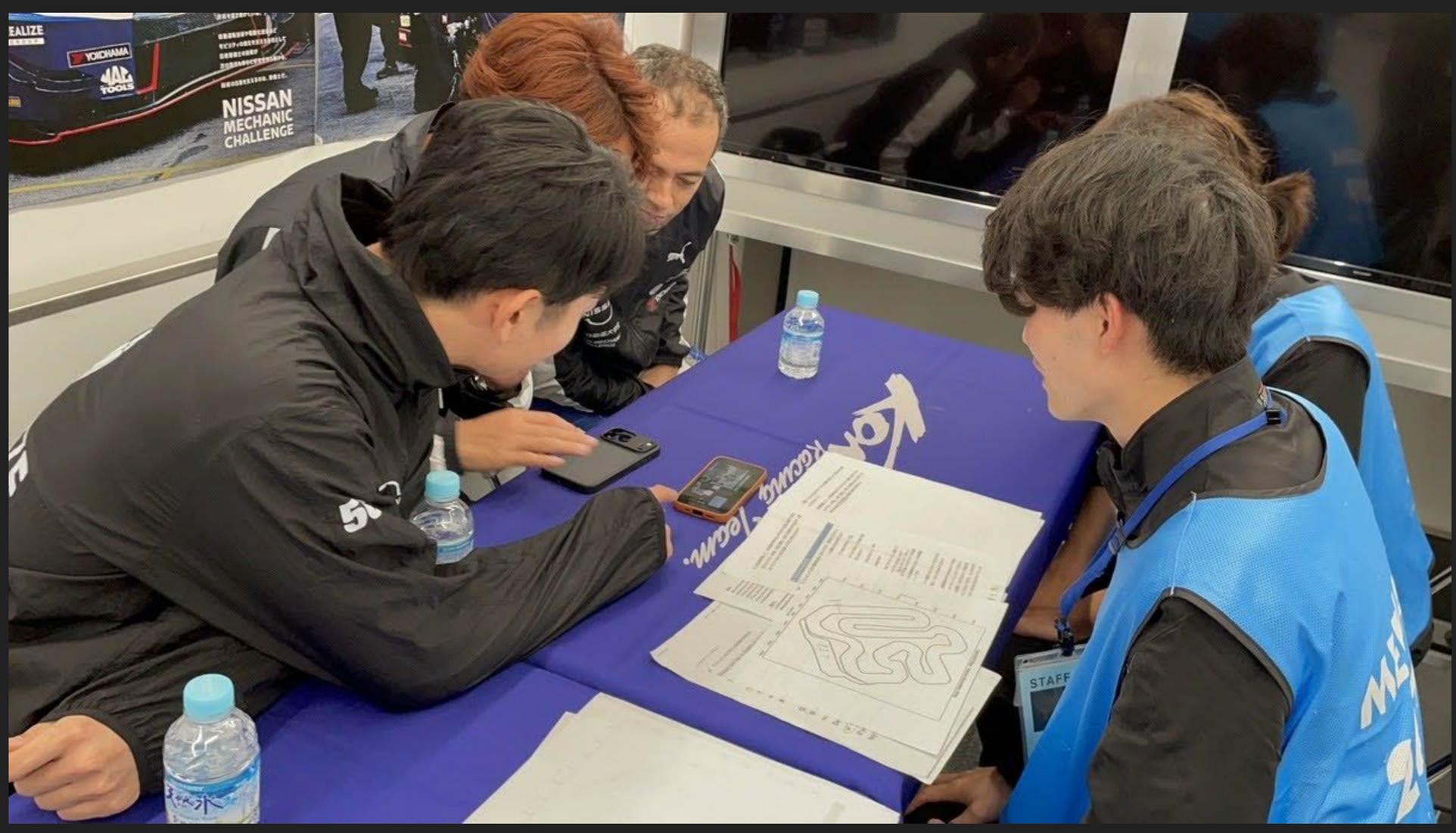
——自動運転はGの影響を受けずに精密な操作ができます。5年後、AIの車と勝負して勝てる自信はありますか？

平手選手： 大丈夫だと思います。今後5年くらいであれば問題ないと思います。ただ、50年後となるとさすがに厳しいでしょうね。

オリベイラ選手：（日本語訳） それは非常に難しいでしょうね。
AIは多くのクラッシュをすると思います。なぜなら、リミットで走ること、リミットを見つけることは、コンピューターで制御するのが非常に難しいからです。グリップレベルを非常に精密に感じ取る必要があります。

レーシングドライバーは、まず本能で感じ取ることができますが、身体も重要です。レーシングドライバーの身体は、マシンが何をしているかを感じ取るために非常に重要なんです。だから、5年後はまだ無理かもしれません。10年後なら可能性があるかもしれませんね。フェルスタッペン（※F1の現役世界チャンピオン。卓越したドライビングテクニックで知られる）のような走りには、AIは簡単には勝てないと思いますよ。 車を横滑りさせながらコントロールするドリフト走行。もしAIがあんな走りをしようとしたら、おそらく壁に激突してしまうでしょう。レーシングドライバーは、車が限界を超えそうになった時でも、感覚で立て直すことができる。

レーシングドライバーの本能、身体で感じるグリップ感、極限での判断力。それらは現時点ではまだAIには真似できない領域だという。トップドライバーたちが見せる、車が滑り出した瞬間の繊細なカウンターステアや絶妙なアクセルワーク。
こうした人間ならではの「感覚」こそが、まだAIが到達できていないところなのかもしれない。
しかし、その「感覚」を再現できれば、10年後には状況が変わるかもしれない。
そんな予感を残しながら、インタビューは終了した。



Student Special ―
監督とドライバーに聞く

それぞれ違う役割でも、
情熱は変わらない。
TS(日産販売会社テクニカルスタッフ)
&学生インタビュー

TS Interview

高根沢誠（たかねざわ　まこと）さん
整備科35期

日産プリンス栃木販売株式会社

普段の業務とは大きく違い、緊張感がありましたが、それ以上に楽しさが大きい刺激的な体験でした。
　丁寧に教えてくださったチームメンバーや販売会社の方々へ、心から「本当にありがとう」と感謝しています。

鈴木秀駿（すずき　ひでとし）さん
工学科8期

栃木日産自動車販売株式会社

今回の活動を通して、プロのレースメカニックのすごさを実感でき、非常に貴重な経験になりました。
　初めて会うメンバー同士でしたが、コミュニケーションを重ねてチーム力が高まったことに感謝しています。

Student Interview

斎藤歩輝（さいとう　いぶき）
広報担当（学生）
体調不良で人数が減る中、役割を分担し、レポートや動画制作を進めることができました。
メンバーには「ありがとう」「お疲れ様でした」と伝えたいです。今回の経験を次に活かしていきたいです。

青山怜平（あおやま　りょうへい）
総リーダー（学生）

SUGO戦に続き総リーダーを務めました。
苦戦も予想されましたが、最後まで諦めずに戦い抜き、緊張感とやりがいのある1日でした。
メンバーには支えてくれて「ありがとう」と言いたいです。感謝しています。

あとがき　来年度へ向けて

今回栃木校が担当したもてぎ戦でしたが、以前参加したSUGO戦のときのようにフルメンバーの参加ではなく、諸事情により少人数での参加となりました。それでも、メンバー一人ひとりがしっかりと役割を分担し、協力し合うことで、大きなアクシデントもなく活動を終えることができました。

少人数での活動は、準備段階から当日の運営まで、一人ひとりの役割が通常よりも大きくなりました。
インタビューの質問項目の作成、選手の皆様とのスケジュール調整、当日の受付対応やサポート業務など、通常であれば複数人で分担する作業を、限られたメンバーで進めていく必要がありました。しかし、だからこそメンバー間のコミュニケーションが密になり、お互いの状況を常に把握しながら、臨機応変に対応することができました。
人数が少ないからこそ、一人ひとりの責任感が増し、全員が当事者意識を持って活動に臨むことができました。この経験は、今後何か予期せぬ事態が発生した際にも、柔軟に対応できる力を身につける良い機会となったと思います。準備段階での綿密な打ち合わせ、当日の迅速な情報共有、そしてメンバー同士のフォロー体制が、スムーズな運営を可能にしたと思います。
この経験は、今後活動する際にも、全体を俯瞰した視点を持って取り組むことに役立つと思います。

栃木校として、Super GTというトップカテゴリーのレースに関わらせていただけることは、大変貴重な機会だと思っています。
モータースポーツの現場で、プロの方々と直接触れ合い、その情熱や技術、人間性を間近で感じることができる経験は、
私たちにとってかけがえのない財産です。この活動の様々なことがこの学校でしかできない、この日産自動車大学校に所属しているからこそできることだと思います。

レース現場の緊張感、チームの一体感、そして選手の皆様のプロフェッショナリズムを肌で感じることで、私たち自身も成長することができています。
最後になりましたが、今回の活動にご協力いただいた関係者の皆様、快くインタビューに応じてくださった選手の皆様、そして私たちを温かく迎えてくださったチームの皆様に、心より感謝申し上げます。

来年度も、栃木校一同、さらなる成長を目指して精進してまいります。
改めてこのような活動の機会をいただき、ありがとうございました。

締めには、偶然お会いして撮影した
日産　代表執行役社長兼CEOの
イヴァン・エスピノーサさんとの写真を貼らせていただきます！

広報担当：(文/写真)

出川貴久（Takahisa Degawa）

斎藤歩輝（Ibuki Saito）

青田倫空（Riku Aota）